

本美濃紙 /生産地域

美濃紙の生産には、地域の環境が重要な役割を担っています。美濃市を囲む山々の大きな谷間には長良川と板取川が流れています。豊かな水と原料が入手しやすいこの一帯は、美濃紙作りに適した土地となっています。

清らかな水からはじまる

紙を作る工程の一つ一つで必ず水を使うため、和紙工房は川や泉の近くにあります。まずは、楮（こうぞ）の枝から硬い外皮をはがし、白い内皮を露出させます。この白皮を剥いで洗い、清流または屋外の桶に数日間浸し、水と日光による自然漂白を行います。内皮を煮て繊維をほぐした後、流水で丁寧に選別し不純物を取り除きます。最後に、綺麗な水を張った浅い漉き舟の中でパルプと天然の分散剤を混ぜ合わせ、竹簀で漉いて薄い和紙を作ります。この方法で、経験豊富な職人は1日に約80枚の和紙を作ることができます。

変色のない白い紙を作るには、紙にダメージを与える不純物や特定のミネラル成分を含まない、きれいな水が必要です。炭酸カルシウムや炭酸マグネシウムなどのミネラルは、樹皮の繊維の結合に影響を与え、紙が弱くなったり、厚さが不均一になったりすることがあります。水中の酸化鉄は、自然漂白に逆作用し、数年後に紙の表面に茶色の酸化痕として現れることがあります。

太陽の光で

美濃紙はその天然の白さで有名ですが、製紙工程の前半と後半の両方で日光による漂白が行われ、これによりさらに美しい白色が引き出されています。楮（こうぞ）の内皮の繊維も、出来上がった紙も、どちらも日光で自然漂白されます。楮（こうぞ）低木の白皮から繊維をはがした後、川の浅瀬や水桶に広げて日光にさらします。日本の他の地域では、楮（こうぞ）の繊維を雪原や収穫を終えた水田に寝かせて漂白を行う場合もあります。

繊維を水に浸して日光にさらした後、職人が念入りに確認しながら不純物を取り除きます。不純物は自然光の中が最も確認しやすいと言われています。経験豊富な職人は、1 日に 1～2 キロの繊維を処理することができます。また、紙の厚みを判断する際にも自然光が好まれるため、和紙工房には川や山々の形式が広がる大きなよろい窓が設置されています。紙は日光が強い場合で最大 1 時間、大きな木製の板の上で天日で乾燥させます。太陽には自然漂白効果があるので、乾燥の過程でさらに漂白されます。こうして、美濃紙の一枚一枚が、天然素材と、周囲の環境と、職人の技により作られていきます。